

# 近代山東省の黄河沿岸における定期市の分布と機能

王 君香（河南工業大学外語学院）

## The Distribution and Functions of Periodic Fairs along the Yellow River in Modern Shandong Province

Wang Junxiang

本稿聚焦近代山东省黄河沿岸の定期集市，在把握黄河沿岸集市分布的基础上，以长清县、历城县、齐河县和济阳县为例，分析清代至民国时期集市的分布与变化，探讨民国时期集市的特征；再以邹平县和历城县为例，通过考察集市构造、商品种类、商品来源、影响范围等具体情况，究明近代山东省黄河沿岸农村经济的转变过程。民国时期，定期集市数量增加，且黄河沿岸呈显著趋势；黄河沿岸集市的分布间隔为 2~3km，其影响范围为半径 3~6km；集市交易的商品大多为农产品和日用品，也有从其他地区或国外输入的加工品。近代山东省黄河沿岸在外国贸易冲击和华北内部经济影响的双重作用下商品经济得到缓慢发展。

### I はじめに

定期市は商品経済が発達する以前に、地域経済において重要な役割を果たしていた。本稿では山東省の黄河沿岸における定期市の分布と変化を究明した上で、定期市の配置、構造、取扱商品など具体的な状況を考察し、黄河沿岸地域における農村経済の変容を検討する。なお、ここでいう黄河沿岸とは黄河から約100kmの範囲内の地域を意味する。

定期市について、石原（1987：1）は週や旬（一句は十日間）など比較的短い周期で開かれる市と定義している。中国における定期市は、唐

末より宋代にかけて、江南地方経済の発展に伴い発達し始めた。しかし、商業の発展につれて、定期市の開催地には次第に小売店舗が設けられるようになり、これらの店舗を媒介とする物資の流通が拡大した。その結果、江南の定期市は当初の経済的重要性を失い、定期市は郷村の小商業都市に発展した。明清時期になると、定期市があまり普及していなかった華北、華南、四川などの各地に広がり、定期市はこれらの地方の農村経済に重要な役割を果たすようになった。清末の定期市的重要性について、中国の農村経済研究会編は以下のように指摘している。「資本主義が侵入した後、支那には新式商業都市が急速に発達し、漸次内地経済に対する支配力を確立して行った。だが支那における地方市場は、依然として幼稚な原始の状態を保持しており、物品の売買は依然として市場的短期市場によっていた」（中国農村経済研究会1938：303）。また、山根（1960：493）は日中戦争の開戦時の定期市について、定期市は依然として農村経済における交換市場として最も普遍的な存在であったと述べている。

従来定期市に関する研究において、加藤（1936：153-204）は清代から民国期に至るまでの地方志を史料として、直隸、山東、山西、河南、福建、広東、広西の七省の諸州県における定期市の数や市日などを整理し、市日の規則性や、市周辺の村鎮との関係などを復元した。天野（1940：109-170）は河北省、山東省、河南省安陽、山西省、陝西省、江蘇省など、広域に分布する定期市を分析対象とし、その分布間隔や、定期市利用者の範囲を概観し、河北省新鎮・深県・獻県、山東省鄒平県と膠県馬店集を具体的な事例として、定期市の交易者や取扱品目、購入者について報告した。山根（1960：493-504）は山東省を中心に、明清時代における華北の定期市展開の共通性を検討した。石原（1973：245-263）は明代より民国期にかけての河北省における人口密度、定期市数、

定期市密度などの変化を検討した上で、定期市分布の特徴を把握し、それに影響を与えた要因を検討した。森（1992：99-112）は清代から民国期にかけての山東省の定期市密度の変化を述べた上で、定期市の商業機能を分析した。中村（1984：125-156）は1870年代から80年代にかけての華北の農村市場（定期市）組織に焦点をあて、農村市場組織の階層構成、空間配置を復元し、通時的に変容の過程を検討した。

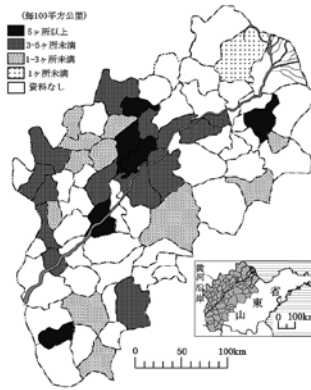
上記のような歴史学や歴史地理学における定期市研究とは別に、G.W.スキナー（1979）は1949、50年に四川省華陽・金堂両県で実施した社会調査を基に、中国の農村市場（定期市）に対し、農村市場の構造、変容過程と人民公社と市場社会の三つの観点から考察した。

以上の中国の定期市に関する先行研究の主な関心は定期市の分布の解明にあり、加藤（1936）、天野（1940）、G.W.スキナー（1979）は多数の省を対象に、定期市の数や市日、市の分布間隔や定期市の利用範囲などを検討し、石原（1973）、森（1992）は定期市の通時的な密度変化を検討している。これらの先行研究では、定期市の分布がどのように変化したかが指摘されてきた一方で、農村生活において定期市がいかなる役割を有していたかは、十分に明らかにされていない。

## Ⅱ 近代山東省の黄河沿岸における定期市の分布

### 1 山東省の黄河沿岸における定期市

近代山東省の黄河沿岸における定期市の分布について、第1図は定期市の密度を示したものである。定期市数は民国期の地方志及び森勝彦（1992：101-103）に基づき集計した。面積は、J.Lossing Buck, *Land Utilization in China*, 1937, pp.24-25の記載に基づく。また、県城は四関・四街<sup>1)</sup>に異なった市日がある場合、一つの定期市として集計した。



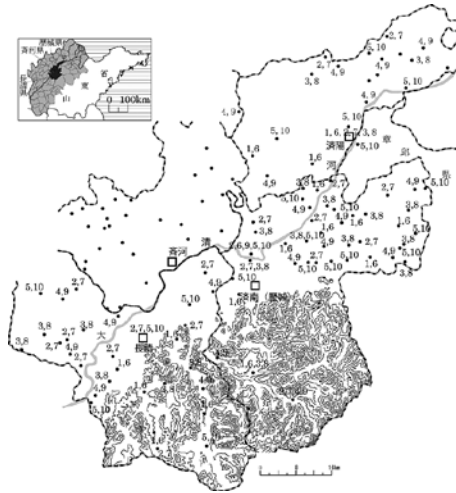
第1図 民国期山東省の黄河沿岸定期市密度

(大宮権平「山東省歴史地図」九十万分一，中文館書店，1934をベースマップとして，定期市数は清代の地方志及び森勝彦（1992：101-103）に基づく。面積は，J.Lossing Buck, *Land Utilization in China*, 1937, pp.24-25の記載に基づく。)

第1図は民国期の黄河沿岸における定期市密度を示したものである。図から民国期の定期市密度をみると，史料が欠如している部分が多いものの，おおよその傾向は把握できる。第1図をみると，民国期には黄河沿いの各県の定期市密度は高い傾向にあり，それに対して，黄河から離れている各県の定期市密度は低い傾向にある。

## 2 定期市の分布—長清・歴城・斉河・済陽の4県を中心に—

清代から民国期にかけての定期市の分布とその変化を，長清・歴城・斉河・済陽の4県を事例に検討する。黄河は1855年に河道が大変遷した後（水利部黄河水利委員会1982：20-21），大清河の河道を奪って渤海に流れるようになった。ここでは，河道が変化する以前と以後の定期市を，それぞれ清代と民国期の定期市として扱い，各時期の定期市の分布を復元し，その分布の特徴を考察する。



第2図 清代の斉河県・長清県・歴城県・済陽県における定期市

注：1) 長清県は1835年、斉河県は1723年、歴城県は1773年、済陽県は1765年の県志に記録された定期市。

2) 長清県における定期市の一部は場所を比定できなかった。

3) 数字は定期市の市日。

(ベースマップは支那駐屯軍司令部陸地測量部参謀本部作成の北支那十万分一地形図を用いた。)

第2図は清代、すなわち河道が変化する以前の定期市の分布を示したものである。大清河沿いの長清・歴城・斉河・済陽の4県における定期市の分布の特徴としては、済陽県東部の黄河沿い、済南以東の黄河北岸、黄河南岸-膠済鉄道間において、定期市分布の密度が高いことが指摘できる。また、斉河県の後の津浦鉄道付近（西北部）も、比較的定期市数が多い。一方、長清県と歴城県においては、南部の山間地域や、黄河沿いの地域、黄河北岸から離れた平野部には定期市はほとんど分布していない。そのなかで、南部の山間地域における定期市は、後の津浦鉄道沿いか谷間に分布している。

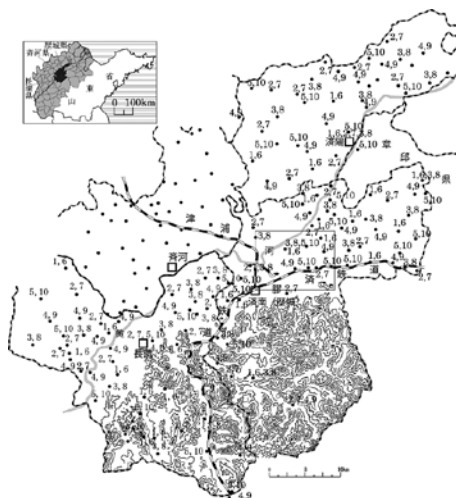
次に、定期市の分布間隔についてみると、定期市の分布密度が高い地域（済陽県東北部の黄河沿い、済南以東の黄河北岸、黄河南岸-後の膠済鉄道間）において、その分布間隔は2～8kmで、ほぼ等間隔に分布している。一方、分布密度が低い地域（長清県の黄河沿い地域、黄河北岸から離れた平野部）においては、分布間隔は1～16kmに及び、不平均に分布している。また同様に密度が低い南部の山間地域においては、後の津浦鉄道沿線では6～8km間隔で、谷間に分散して分布している。

長清、齊河、歴城、済陽の県境付近には定期市は比較的少なく、県境から一定距離にある県境付近には多く分布している。石原（1973：254）は「県境内部ないし四関の市が多くの県の場合極めて隆盛であり、多くの周辺村落の村人をひきつけ、周辺地域に他の市を成立せしめないことによるもの」と指摘している。石原の指摘を援用すると、第2図において県境付近に市があまり分布していない要因としては、県城内の市の規模が大きいため、その周辺には市が発達しなかったことが挙げられる。

定期市の市日について、長清県城では齊河を除き、四関と東北関<sup>2)</sup>において1日から10日まで順に定期市が開かれる。定期市は10日に2回開かれる場合（六斎市）が多いものの、済南北の黄河南岸にある市では10日に4回、黄河北岸の市では10日に5回、済陽県城では10日に6回開催されている。これらの市は同じ市が回数を多くして開かれていたのではなく、市日を大集と小集に分けて開かれていた可能性がある。市日の配置について、石原（1973：254）は「原則として隣接市とは市日の競合を避けるべく配慮がなされている」と指摘している。黄河沿岸の定期市の市日について、石原の指摘のように、競合を避けて設定しているかを検討すると、歴城県の東北部の黄河北岸、歴城県と済陽県の県境付近には、2～3kmの間隔で5ヶ所の市が分布しているが、これらの市は、10日間に5ヶ所の市が重複することなく一巡するように市日が調節され

ている。それに対し黄河南岸では、隣接している市の市日は異なる場合が多いが、共通している場合も存在する。長清県と済陽県でも同じ傾向が見られる。

第3図は、民国期の斉河県・長清県・歴城県・済陽県における定期市の分布を示したものである。民国期の定期市は、平野部に密に分布し、南部の山間地域には散在していることが読み取れる。山間地域における定期市は、おもに山地の麓に位置している。また、黄河沿いと鉄道沿線では、そのほかの地域より定期市密度が高い。



第3図 民国期の斉河県・長清県・歴城県・済陽県における定期市

注：□の範囲は後述の冷水溝荘の外邦図の範囲。  
(ベースマップは第2図に同じ)

定期市の間隔は、長清県および歴城県東部の黄河沿いに位置する高密度地域では、2～3 kmの間隔で分布している。一方、定期市密度が比較的低い山間地域では、3 km以上の間隔となっている。

定期市の分布は県城付近には比較的定期市が少なく、県城からある程度離れている県境、及び鉄道や黄河沿いに多く分布している。市日については、長清県の県城の場合、城内は旧暦10日、西関は2日と7日、南関は5日であり、10日間のうち4日（2, 5, 7, 10）市が開かれる。済南北部に位置する黄河南岸の市も、10日間のうち4日（2, 3, 7, 8）が市日で、済陽県城も同様である（城里集は3日、東関は1日と6日、南関は8日）。それ以外の定期市は10日に2日開かれることが多い。済南北部の黄河南岸の市日が多いのは、そこは黄河の要所にあり、上下流からの水運貨物が集散する碼頭があるためである。ここから、県城や碼頭など、交通の要所にあたる地域の定期市において、その開催の頻度は、それ以外の地域の定期市より高いことが指摘できる。定期市の市日配置は、多くの場合は隣接市と避けるようにされているが、少数ながら市日が同日の場合も見受けられる。

第2図と第3図とを対比すると、民国期の定期市には次のような変化が指摘できる。①民国期には定期市数が大幅に増加した。その傾向は長清県、齊河県、済陽県において顕著である。②清代に確認された定期市のなかには、消滅しているものもあるが、多くは民国期においても確認できる。膠済鉄道沿線の定期市の多くは清代においても確認できる。③増加した定期市は長清県、齊河県、済陽県の黄河沿岸に多く分布している。また、齊河県と済陽県において、黄河から離れた地域に増えた定期市は均等に分布している。④津浦鉄道沿線、特に黄河北側の定期市数の増加は南岸の鉄道沿いより顕著である。

民国期における定期市の増加は、黄河沿岸地域の農村において、清代より商品取引が活発になったことを示している。また定期市の増加により、地域社会における商品流通が盛んになったことが考えられ、商品流通の発展は、陸路交通だけでなく、水運交通の利用も促進したと考えら



れる。

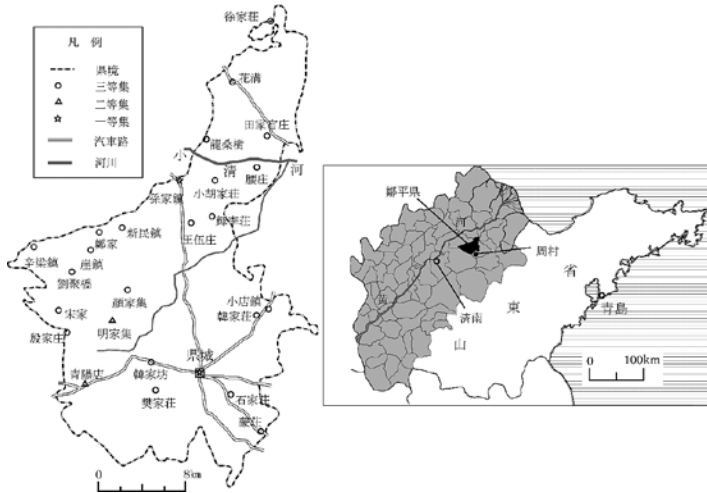
しかし、上述の4県の定期市に関する情報は限られているため、市の規模、市場圏、取り扱われた商品、利用する人などは不明である。これらについて、鄒平県と歴城県における定期市の事例の検討を通して明らかにする。

### Ⅲ 鄒平県における定期市

本章で用いる鄒平県の定期市に関する調査史料は、1933年の春末夏初間、楊慶堃により3ヶ月に渡って山東省鄒平県で調査された内容が記載されたものである。当該史料では、農村における自給自足を問題と捉え、農村の自給自足と定期市との関係について調査している。この調査は『天津大公報』に掲載され、「二個農村市集調査的嘗試」（『天津大公報』1933年7月8日第11版）と、「市集現象所表現的農村自給自足問題」（『天津大公報』1934年7月19日第11版と1934年8月30日第11版（続第14期）という二つの論文に分けて掲載されている。田中（1935）は当該史料を翻訳しつつ、中国の農村における自然経済の変化について検討した。天野（1940）も当時の農業経済を論じた中で、定期市を検討する際にその内容をかなり引用している。本章では主として原典である楊の新聞掲載記事を史料として利用し、天野の著作も参考にした。

鄒平県は山東省黄河の東部に位置し、黄河から25里（14.4km）<sup>3)</sup>の距離にある（第4図）。面積は546km<sup>2</sup>で、人口は155,768人である。地域の大部分は平野であるが、南部には丘陵があり全県面積の約1/6を占める。県内には砂地が多く、主要農産物は棉花、小麦、高粱、馬鈴薯である。県内の交通については、县城から25里（14.4km）の距離に膠済鉄道がある。北部には小清河が横断し、渤海から済南まで帆船の航行が可能である。また、近隣には周清（周村—小清河）汽車路があり、周村から県

城に通じ、北上して小清河に至る。そのほかの交通として大車路がある。



第4図 鄒平県における定期市

注：一等集は規模も最も大きな定期市であり、二等集はそれより規模が小さい市で、三等集は農村における定期市規模の最も小さいものである。

(定期市は楊慶堃「市集現象所表現的農村自給自足」『天津大公報』1934年7月19日第11版に基づき、地図は中華民国十万分一地形図「鄒平県」(1936年)と「青城県」(1936年)をベースマップとして作成。)

第4図は民国期の鄒平県における定期市を示したものである。定期市は25ヶ所あったが、県域における定期市の分布には、北部は密で南部は疎であるという特徴が読み取れる。これは県域以北が平野で、以南は丘陵地という地形が関係していると推定される。定期市の規模について、楊慶堃は鄒平県の定期市を一等集、二等集、三等集の三段階に分類している。一等集は県域と孫家鎮、二等集は明家集と青陽店、残りはすべて三等集であり、定期市の位置関係から分類されている。一等集である孫家鎮は、大車路の交差点付近にあり、小清河に通じる汽車路がある交通

の要所である。小清河は済南につながり、汽車路は膠済鉄道の重要な集散中心となる周村へつながる。二等集である明家集も大車路の交差点に位置し、鄒平県、章邱県、齊東県などの県城及び周辺の各集落へとつながる大車路がある。明家集も、比較的交通の利便性が高い。三等集は、一般的に田家官荘のような1本の大車路があり、そのほかには各集落に通じる小道があるような場所に位置する。三等集の分布は、小清河の主流と支流の間において高密度になっている。

第1表 鄒平県における来集村の定期市からの距離

集名	集落と定期市間の距離(里)
孫家鎮	10.0
王伍荘	8.7
輝李荘	6.5
花溝	7.0
田家官荘	3.6
腰荘	4.2
田鎮小集	5.0
小店	5.0
韓家店	9.0
段家荘	7.2
顔家集	4.0
劉聚橋	4.8
明家集	10.0
城関	10.0

第2表 鄒平県における定期市の集客半径

半径里数	集市数
0~4.9	4
5~9.9	7
10~15.0	3
総数	14

(第4図と同じ資料に基づき筆者作成)

(第4図と同じ資料に基づき筆者作成)

定期市の支配圏について、第1表は鄒平県の各定期市を利用する集落から市までの距離を示したものであり、第2表は第1表に基づきまとめたものである。第2表をみると、集客半径が0-4.9里（0～2.8km）の市は4ヶ所、5-9.9里（2.88～5.7km）は7ヶ所、10里（5.8km）以上は3ヶ所である。このことから、天野は5～10里（2.88～5.76km）が、農村集市の集客範囲において最も普遍的であるとしている（天野1940：131）。この範囲はG.W.スキナーが提唱した標準市場圏の大きさ（半径3.1～6.1km）（G.W.スキナー1979：49）とおおよそ一致していると言える。楊慶堃は「地方の不文律で以て五里以内に、二つあるいはそれ以上の市集を設けることが出来ない。それは、市集と市集との間が近すぎると、競争が必ず起こり、市集の税捐（斗税及び牙税）の徴収を請負う包税人は、顧客及び税捐を維持するために、県政府に訴え出て新市集の成立を抑止し、以て旧市集の税収を維持し、旧市集の顧客が新市集に吸収されないよう、阻止するからである」<sup>4)</sup>と解釈している。

定期市の市日については、定期市毎に記されていないが、楊慶堃はすべての市は5日に一回開かれ、市日は旧暦の1・6、2・7、3・8、4・9と5・10であり、隣接している市の市日は重複しないようにしていると記録している（楊1933）。定期市の開市時間は、一等集は朝6-7時から開市し、9-12時は人が最も多く、12時以降には人が少なくなり、15時頃に終了する。二等集は朝6-7時から開市し、12時過ぎに終了する。三等集は朝7-8時に開市し、11時以降に終わる。また雨天であれば、すべての市は開催されない。

定期市を利用する人口数と集落数は、第3表と第4表に示した通りである。

第3表 鄒平県における各定期市の  
利用人口数と集落数

集名	人口数（人）	集落数
田家官莊	1,753	8
樊家莊	2,892	7
腰莊	3,317	9
顔家集	3,803	9
小胡家莊	3,836	8
徐莊	3,951	7
蒙家莊	4,102	9
岸鎮	4,511	12
劉聚橋	4,692	10
韓家坊	5,007	9
新民鎮	5,118	8
王伍莊	5,447	13
辛梁鎮	5,966	14
龍桑樹	6,280	19
石家莊	7,082	22
輝李莊	7,614	20
小店	7,657	16
宋家集	8,205	15
段家莊	9,259	22
花溝	9,839	21
明家集	11,625	23
青陽店	12,137	17
韓家店	14,899	31
孫家鎮	17,858	60
城関	48,453	83

（第4図と同じ資料に基づき  
筆者作成）

第4表 鄒平県における各定期市の  
活動範囲内の人口分布

各集市利用 人口数（人）	基本集	補助集
0～1,999	1	0
2,000～3,999	5	0
4,000～5,999	7	0
6,000～7,999	4	0
8,000～9,999	3	0
10,000～19,999	1	3
20,000～29,999	0	0
30,000～50,000	0	1
合計	21	4

（第4図と同じ資料に基づき  
筆者作成）

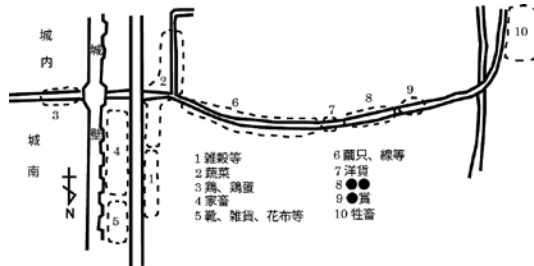
楊は定期市を一～三等の区分とは別に、「基本集」と「補助集」に分けて示している。天野によると、「基本集」とは、地方人の日常生活の普通の需要を充たす程度の市であり、その商品の種類も、僅かな数種の簡単な食料品・日用雑貨に過ぎず、その数量も比較的少ない。「補助集」とは近隣集落の基本的又は例外的需要を充足するものである（天野1940：133）。第3表は鄒平県における基本集の利用人数と利用集落数を示したものである。利用人数が最も少ないのは田家官荘の1,753人で、最も利用人数が多いのは韓家店の14,899人である。基本集の平均利用人数は5,963人である。補助集について、最も利用人数が少ないのは明家集の11,625人で、最も多いのは城関の48,453人である。補助集の平均利用人数は22,518人である。

第3表の人数を階級区分してまとめたのが第4表である。第4表をみると、21ヶ所の基本集のうち、7ヶ所の利用人数は4,000～5,999人であり最も事例数が多い。また、4ヶ所の補助集のうち、3ヶ所の利用人数は10,000～19,999人である。鄒平県では、天野が指摘するように「約6千人が結合して、1つの基本集の活動単位をなし、また4つ乃至6つのこのような基本的な単位が結合して、1つの約2万人の補助集の活動単位をなしている」（天野1940：133）と解釈できる。従って、「鄒平の農村社会は5～10里（2.88～5.76km）、又は6千人～2万人のいくつの零細単位に分割され、その各単位の中に、1個あるいは数個の市集があって、経済交通の中心をなしている」（天野1940：133）のである。

定期市の交易者の大部分は、付近に居住する農民で、とくに三等集には農民が多く訪れていた。農民は定期市で自家産の農産物を販売していた。集落内の小店舗経営者は、自身の店舗の商品を補充するために定期市へ訪れる場合があった。また、ごく少数であるが、他地域の貨物を持ってくる遊行商人が存在した。農村の定期市には正式な組織がなく、

小販売者は貨物を持参し、標準価格を決め、納税し、完売後は帰る。定期市の治安は法律により保たれ、売買の公平は秤局と斗局により管理された。食糧、棉花の売買は官秤官斗で量り、それにより税額を決め、納税させた。

取引方法は3種類に分類される。一つ目は仲介人がない取引で、農民が自家産の食糧や布などを市に持参して売る形態である。この取引方法が最も多いとされる。二つ目は生産者と購入者の間で仲介を一度経る取引で、三つ目は二度の仲介を経る取引である。



第5図 鄒平県城西関における定期市の構成と位置

注：●は判読できない文字を示す。  
 (楊慶堃「二個農村市集調査的嘗試」『天津大公報』  
 1933年7月8日第11版に基づき筆者作成)

第5図は、鄒平県県城の西関に開かれる定期市で取扱われる商品とその配置を示したものである。当該の定期市においては、雑穀類、蔬菜類、鶏と鶏蛋(卵)、家畜、靴・雑貨・花布などの10種類が販売され、販売場所がそれぞれ分かれていた。商品の種類により、食糧市、野菜市、家畜市などと呼ばれており、各市の場所は決まっていた。第4図にみるように、市は道路沿いにあり、牲畜市はほかの市からやや離れた場所に設置されていた。

取引される商品について、天野は、多くの定期市（三等集）で取引される商品として「(1) 農家の生産品—糧食・糖・肥料・塩等々，(2) 日用の茶点—豆腐・酒・大餅等々，(3) 日用の雑物—洋火・香（線香）・燭（ろうそく）等々」（天野1940：136）を紹介している。そして、鄒平県の一等集，二等集の商品として，以下の品目が挙げられている [楊1933]。

- 1 食物—如糧食，蔬菜，肉類，雜糧等。
- 2 雜耗品—如洋火（マッチ），煤炭（石炭）等。
- 3 安息品—如茶葉（茶），點心（菓子），烟（煙草）等。
- 4 日用品—如洋貨，銅鐵器，陶器等。
- 5 服用品—如洋布，土布，衣，帽等。
- 6 文房用具
- 7 宗教品—如香（線香）及黃表（神仏を祭るのに用いる黄色い紙）等。
- 8 生産品—如農具，菜種，肥料，花，紗，牲口（家畜）等。
- 9 娛樂—如唱戲（芝居），賭博（賭け事），雜耍打武（手品・曲芸など）等。
- 10 執役—如剃頭（理髮），卜卦（占い），補鞋（靴の修理），医薬等。
- 11 雜項。

上述の品目には，糧食，蔬菜，菜種，牲口など農民自身が生産できるものがあるとともに，煤炭，銅鐵器，陶器など，農民による生産は難しく，他から移入により入手したと思われる品目がある。また，唱戲，賭博，雜耍打武等の娛樂項目や剃頭，卜卦，補鞋などの商売も行われていた。一等集，二等集の品目は多岐にわたっていた。



第5表 鄒平県10ヶ所の定期市における各種貨物の来源地

市集名	50里以内		51-100里		101-300里		300里以上		合計	
	総額 (\$)	%	総額 (\$)	%	総額 (\$)	%	総額 (\$)	%	総額 (\$)	%
孫家鎮	15,690	52.4	720	2.4	6,690	22.3	6,850	22.9	29,950	100.0
王伍莊	3,710	81.2	120	2.6	280	6.1	460	10.0	4,570	100.0
輝李莊	2,485	63.7	210	5.4	375	9.6	830	21.3	3,900	100.0
花溝	4,870	60.8	170	2.1	500	6.2	2,480	30.9	8,020	100.0
田家官莊	455	60.7	—	—	70	9.3	225	30.0	750	100.0
腰莊	720	60.0	70	5.8	—	—	410	34.2	1,200	100.0
田鎮小集	465	57.4	30	3.7	40	4.9	275	34.0	810	100.0
小店	4,135	45.7	300	3.3	1,420	15.7	3,195	35.5	9,050	100.0
韓家店	5,885	65.3	180	2.0	730	8.1	2,210	24.6	9,005	100.0
段家莊	6,090	69.9	280	3.3	380	4.4	1,960	22.5	8,710	100.0
合計	44,505	58.6	2,080	2.7	10,485	13.8	18,895	24.9	75,965	100.0

(楊慶堃「市集現象所表現的農村自給自足」『天津大公報』  
1934年8月30日第11版に基づき筆者作成)

第5表は、鄒平県の10ヶ所の定期市における各種貨物の来源地を示したものである。来源について楊慶堃は50里(28.8km)以内、51-100里(29.4~57.6km)、101-300里(58.2~172.8km)、300里(172.8km)以上の4つの範囲に区分している。各定期市の合計をみると、各種貨物の来源地は、50里以内が58.6%で最も多く、300里以上は24.9%でそれに次ぐ。51-100里は2.7%で最も少なく、101-300里は13.8%で、51-100里よりやや上回る。また、各定期市の貨物の来源地についても同じ傾向がみられる。このような貨物の来源範囲の差異について、貨物の種類に注目して検討する。各来源範囲に含まれる主要貨物を示したのが第6表である。

第6表 鄒平県10ヶ所の定期市における主要貨物の来源範囲

地域別	品目
50里以内	糧食・蔬菜・糕（菓子）・麵（小麦粉）・豚肉・点心（菓子）・掛麵（素麵）・鶏・蛋・蚊香草・洋鉄の壺燈（壺形のランプ）・木器・柳条（柳の枝）或は桑条（桑の枝）等の器具・土布・靴子・衣服・香（線香）・燭（ろうそく）・大車用の皮貨・牲口・菜種・木材・一部の鉄器等
51-100里	章邱産葦蓆子（葦で作られた蓆）・周村産洋襪下（靴下）・帯子・筆・墨・印刷品・鏡・酒等
101-300里	臨淄の陶器・蒙陰沂水産の烟葉・沙頭北理子産の咸鱼（海魚）・済南の工業品等
300里以上	青島上海の隣寸・香煙（煙草）・洋紗・洋布・機製品・日本産洋紗・布疋・洋鉄・鉄器・日用品・河南清化産竹器・山東曲阜産蓆子・濰県の布疋・上海の文具・安徽浙江産茶葉・江蘇産錫箔・元表（不明）・外国産牲口等

（第4図と同じ資料に基づき筆者作成）

第6表をみると、50里（28.8km）以内の主要貨物は糧食（食糧、蔬菜、小麦粉など）、線香などの消耗品、壺形のランプなどの日用品、器具（木器、柳の枝、桑の枝など）、大車用の皮貨などである。これらの貨物の生産地は周辺集落の農家、あるいは地方の小手工業坊などである。これらの品目は農民の日常生活に不可欠なものである。来源範囲が50里以内の貨物は農家や地方の小手工業者が生産しやすい物である。そのため50里以内から集荷された貨物が最も多い。51-100里（29.4～57.6km）の範囲から集荷されたものには、章邱産の葦蓆子、周村産の洋靴下、帯子、筆、墨、印刷品、酒などがあり、50里以内の貨物とは種類に差異がある。これらの貨物の日常生活における必要度合いは高くなく、販売額も少ない。101-300里（58.2～172.8km）からの貨物は、おもに臨淄の陶器・蒙陰沂水産の烟葉・沙頭北理子産の咸鱼・済南の工業品等である。この範囲には済南の小規模な日用品などの機械工業品があり、博山の煤

炭などの鉱物もある。300里（172.8km）以上の主要貨物としては、青島および上海の隣寸・香煙・洋紗・洋布・機製品・日本産洋紗・布疋・洋鉄・鉄器・日用品・河南清化産竹器・山東曲阜産蓆子・濰県の布疋・上海の文具・安徽浙江産茶葉・江蘇産錫箔・外国産家畜などがあり、品数は多い。これらの貨物は鄒平県内で生産されたものと大きな差異がある。当該範囲には沿岸の港があるため、海外の輸入品及び全国からの生産品が含まれる。高価な品が多いため、300里以上の貨物の販売額は高いと考えられる。これは、貨物を農産品、手工業品、機械工業品に分類し、来源範囲別にまとめた第5表のデータからも裏付けられる。

また、第7表によると、来源範囲が50里以内の貨物のうち80%は農産品で、20%は手工業品であり、機械工業品はない。それは鄒平県から半径50里（28.8km）以内には機械工業品の生産地がないことが要因として挙げられる。半径51-100里（29.4～57.6km）の貨物のうち、手工業品は88.1%に達し、機械工業品は11.9%で、農産品はない。農産品がないのは、すでに指摘したように、農民の定期市の利用範囲としては半径5-10里（2.88～5.76km）が最も利用頻度が高く、通常は自家産の農産物を付近の定期市に販売し、50里以上離れた定期市に売りに行くことはほとんどなかったためである。また、半径51-100里の範囲における農産物は50里以内のものとの差異がなく、51-100里からの農産品はほとんど必要とされなかったためと考えられる。そして、この範囲の機械工業品は、周村に機械工業があるため、周村から来た可能性が高い。その他に、顔家橋には醸造業があり、手工業品は周村や城鎮、または付近の手工業者のいる集落から集荷されたと考えられる。半径101-300里（58.2～172.8km）の貨物のうち、農産物は64.3%、手工業品は9.1%、機械工業品は26.6%を占める。農産品が多いのは、101-300里の範囲の地理環境は、50里以内とは異なるため、農産品の種類に差異がみられるためと考えられる。当

該範囲にある済南は工業が盛んであり、臨淄は陶器生産の中心地で、蒙陰沂水は烟葉の生産地である。300里（172.8km）以上の距離から集荷された貨物のうち、農産品は36.9%、手工業品は18.3%、機械工業品は44.8%である。どの品目においても一定数の貨物があるのは、集荷範囲に青島のような港があり、全国の農産品や手工業品と機械工業品が、また外国の農産品、手工業品と機械工業品が運ばれてきたためと考えられる。

第7表 鄒平県11ヶ所の定期市における各種貨物の来源地と金額

地域別		50里以内	51-100里	101-300里	300里以上	合計
農産品	\$	36,705	—	6,775	7,195	50,675
	%	80	—	64	37	65
手工業品	\$	9,190	1,850	955	3,375	15,570
	%	20	88	9	18	20
機械工業品	\$	—	250	2,805	8,745	11,800
	%	—	12	27	45	15
合計	\$	45,895	2,100	10,535	19,515	78,045
	%	100	100	100	100	100

（第5表と同じ資料に基づき筆者作成）

#### IV 集落からみた定期市—歴城県冷水溝を中心に—

冷水溝莊は歴城県にある一集落で、済南市の東北25里（14.4km）にある。戸数は約370戸、人口は約1,000人である。耕作地は合計約42頃（280ha）で、そのうち、約14頃は水田である。生産された米はすべて商品として販売される。水稻は集落の重要な産品で、畑は26頃で、主に麦・高粱・粟等を作っている。

冷水溝莊の村民が、最も利用する定期市は冷水溝莊から6里（3.5km）離れた王舎人莊である。そのほか、沙河、大辛莊、壩子、韓

倉もよく利用される。沙河は冷水溝莊から4里(2.3km)、大辛莊は8里(4.6km)、壩子は10里(5.76km)離れている。18里(10.4km)の距離にある東王莊<sup>5)</sup>と、25里(14.4km)離れた済南も利用されるが頻度はさほど高くない。以上から、冷水溝莊の村民が利用する定期市は半径4～25里(2.3～14.4km)の範囲内であると推定される。



第6図 歷城県冷水溝莊

注：1) ★は王舍人莊を利用する集落

2) 東王莊の位置は不明のため、図示していない。

(「済南」北支那十万分一図西八行北二段済南五号、T4年略測図、S9・S10年要部修正略測図、S6年製版、S9年方眼描入、S11年修正改版、岐阜県立図書館所蔵をベースに、『中国農村慣行調査』(第2冊 集落は232頁)の記述に基づき筆者作成)

第6図は、歷城県冷水溝を中心、周辺地域を示したものである。冷水溝莊は王舍人莊、沙河、大辛莊、壩子、韓倉に囲まれ、ほぼ中央に位置している。

各定期市の市日について、王舍人莊は旧暦の2・7日、沙河は3・8・5・10日<sup>6)</sup>、壩子は1・6日、大辛莊は4・9日、韓倉は5・10日、東王莊は3・8日である。利用頻度の低い東王莊を除くと、残りの定期市の市日は1～10日の間に順に並んでいる。そのため、冷水溝莊を中心

に半径4～10里（2.3～5.8km）の範囲では毎日定期市が利用できたと考えられる。

王舎人荘の定期市を利用する集落は「冷水溝荘、楊家屯、李家庄、郭家庄、趙家庄、牛王庄、陳家庄、皮家堂<sup>7)</sup>、梁王庄等」[中国農村慣行調査刊行会編1955：232]で、これらの集落を第6図で比定すると、冷水溝と牛王庄は王舎人荘から最も遠く、約4km離れている。陳家庄は最も近く、距離は約1kmである。そのため、王舎人荘の市を利用する集落は半径1～4kmの範囲内であると考えられる。

定期市の規模は王舎人荘と壩子が最大で、最小は沙河である（中国農村慣行調査刊行会編1955：328）。また、大辛荘の定期市は沙河よりやや大きい（中国農村慣行調査刊行会編1955：328）。定期市における取扱商品は、王舎人荘では、麦・粟・豆・高粱などの穀類（中国農村慣行調査刊行会編1955：169）、大根・菠菜・白菜・葱・野菜<sup>8)</sup>などの野菜類、面粉・豆餅などの加工品類、自家製綿・綿布・洋火・石油・石鹼・玉子などの日用雑貨類（中国農村慣行調査刊行会編1955：227）、鶏・鴨及び家畜類などである。壩子では家畜類が取引されており、沙河と大辛荘には青菜と肉の市があるが、牲口市はない（中国農村慣行調査刊行会編1955：328）。また、どの市でも雑貨雑穀が扱われている（中国農村慣行調査刊行会編1955：228）。ここから、農村の定期市においては、農民たちの生活に密接に関わる穀物、野菜、日用雑貨などが主に取引されていたといえる。また、規模の小さい市においては商品の種類が少なく、大きい市では商品の種類は豊富であることが指摘できる。これらの商品の来源地は、穀物、野菜、家畜などは定期市周辺の農村が中心で、雑貨類は済南から運ばれたものが多い。また、済南付近の集落は耕地が狭小であることから食糧を購入する必要がある、かつては黄河の水運により河北省から高粱を運んでいたが、鉄道が開通した後、それは鉄道で運搬されるよ

うになった（中国農村慣行調査刊行会編1955：249）。

王舎人荘の定期市は午前8時頃から正午まで開催され、遅い場合でも13時には終わる。市は駅へ通じる街上に開かれ、露店だけでなく店舗もある。定期市に出店する場合、地攤銭という定期市の道路利用料金を、道路両側の土地所有者に支払う。道路の中央まで両方の土地所有者の所有地である。地攤銭の金額は不定で、販売の大小によって差異がある。おおよそ、雑貨商は3, 4元、食糧商は2, 3元を季節・年末等に分けて支払う。市では、糧食市・青菜市・鶏子児市などの品目ごとの位置が決まっているが、糧食市の場所は毎回変化する。（中国農村慣行調査刊行会編1955：228-233）

市での取引は、商人、農民ともに自由売買である（中国農村慣行調査刊行会編1955：228）。定期市には農民を主として、糧販と仲介人などが集まる。農民は自家産の穀物を市に持参し、一方でその穀物は自家食用に農民が購入するが多い（中国農村慣行調査刊行会編1955：232）。農民のほか、糧販も定期市における重要な買手である。糧販とは穀物を荘内で買付け、済南の糧舗に販出する人物である（中国農村慣行調査刊行会編1955：217）。冷水溝荘の糧販は6人で、いずれも十畝以下の耕地を所有する農民である。彼らは農業が主な生業であるが、副業として糧販をやっている（中国農村慣行調査刊行会編1955：263）。糧販はどの集落にも存在し、各農家は余分な穀物を定期市に持ち出し、糧販はそこで売買をする。穀物の多くは車に載せ、家畜に引かせて運搬する。その後、済南の糧舗に売りに行き、糧販は運賃を得る。済南での販売先はその都度決め、相場がよい場合には毎日運搬する。麦の売買を専門とする糧販は、1910年代頃には家で製粉し済南に売りに行ったが、済南で麵粉会社が設立された以降は、製粉せずに販売するようになった。また、糧販は一人で多種類の穀物を扱うわけではなく、各種の穀物を専門的に売

買った（中国農村慣行調査刊行会編1955：264）。

穀物の値段は、売手は値段を高く、買手は低く提示し、交渉して決める。また、品物を持って行く場合は、前回の定期市の値段を参考にする。米・麦はさほど価格は上下しない。また、麦の値段は済南の製粉工場の需要によって変化し、買入が多い場合は高くなる（中国農村慣行調査刊行会編1955：263）。支払い方法としては、糧販は麦を買付けるときに現金で払わずに口頭で取り決め、済南に到着後に支払う（中国農村慣行調査刊行会編1955：234）。定期市で糧食を取引する際には現金で売買する（中国農村慣行調査刊行会編1955：228）。

以上『中国農村慣行調査』をもとに、定期市の利用範囲や定期市における商品の種類などを検討した。冷水溝荘を中心として毎日定期市が利用できる範囲は半径4～10里（2.3～5.8km）である一方、王舎人荘の定期市を利用する集落の範囲は半径1～4kmであった。これは先に第3図で示したように、黄河沿いの定期市が高密度で分布する所では、2～3kmの間隔で定期市が分布することとおおよそ対応している。また、規模が大きい王舎人荘と壩子の定期市は大集、その他は小集に相当すると考えられ、6km四方程度の範囲内に分布する定期市の規模は一様ではなく大小があったことが確認できる。定期市において取引された商品は主に農産物と日用品で、農産物の多くは定期市付近の農村で生産されたものであったが、棉布や洋火、石油のように済南から運ばれたものもあった。また、冷水溝荘のように耕地面積が少ない地域では、鉄道建設以前に黄河の水運により河北省などから糧食が運ばれ、付近の定期市で売買されていた。

## V おわりに

本稿では山東省を中心とする黄河沿岸における定期市の分布と機能を



検討した。まず、民国期における定期市の分布は、黄河沿いの各県の定期市密度は高い傾向にあり、それに対して、黄河から離れている各県の定期市密度は低い傾向にあることが判明した。

続いて、黄河沿岸における清代から民国期にかけての定期市について、分布の変化を長清・歴城・斉河・済陽の4県を事例に検討し、以下の点を指摘した。①民国期の定期市の数はかなり増加し、長清県、斉河県と済陽県においてその傾向は顕著である。②清代の定期市の多くは存続しており、とくに膠済鉄道沿いの定期市の多くは清代にも確認できる。③新設された定期市は長清県、斉河県と済陽県の黄河沿岸に多く分布しており、黄河から離れた斉河県と済陽県の各地域で増加した定期市は均等に分布している。④津浦鉄道沿い、特に黄河北側部分には南岸の鉄道沿いよりも定期市数の増加が顕著である。⑤定期市増加の傾向から、黄河沿岸地域の農村における商品取引は、清代より民国期に進展したと考えられる。⑥民国期の定期市は、黄河沿いでは2～3km、山間地域では3km以上の間隔で分布していた。

さらに、鄒平県と歴城県を事例に、定期市の構造、取り扱われた品目及びその来源地、利用する人の範囲などを検討した。鄒平県では、定期市の規模はその立地と関わっており、規模が大きい市は交通の要所に位置していた。多くの定期市の集客範囲は半径5～10里（2.88～5.76km）であった。定期市で取引される商品の種類と来源地について、鄒平県の場合は、50里（28.8km）以内の貨物は農産品が80%を占めていた。51-100里（29.4～57.6km）の貨物は手工業品が88.1%に達し、101-300里（58.2～172.8km）の貨物において農産品は64.3%、手工業品は9.1%、機械工業品は26.6%を占めていた。300里（172.8km）以上の貨物においては、農産品は36.9%、手工業品は18.3%、機械工業品は44.8%であった。鄒平県を中心とする半径50里以内の地域の生業は主に農業で、定期市で

流通していた農産物の多くは付近の農家により生産されたものであった。一方、日用品の中には遠距離の輸送により供給される物があった。

集落からみた定期市について、歴城県冷水溝荘では、毎日市が利用可能な範囲は半径4～10里(2.3～5.8km)であり、王舎人荘の定期市の利用範囲は半径約1～4kmであった。歴城県の事例は、王舎人荘の定期市の利用範囲はやや狭いが、鄒平県の多くの定期市の集客範囲は半径5～10里(2.88～5.76km)であったことと、おおよそ一致しており、当時の黄河沿岸地域の基礎的な定期市の市場圏は半径2.3～5.6kmであったとみることができる。そして、これはG.W.スキナーが提唱した標準市場圏の大きさ(半径3.4～6.1km)とおおよそ一致しているといえる。

取引商品は主に農産物と日用品で、農産物の多くは定期市付近の農村で生産されていたが、日用品のなかには棉布や洋火、石油のように済南から運ばれたものもあった。また、冷水溝荘のように耕地面積が狭小である村では、他地域から移入される場合があり、その運搬には、鉄道敷設以前は黄河の水運が用いられ、河北省などから運ばれた。

以上のように、定期市における商品から黄河沿岸における農村経済の変容をみると、燐寸のような国産品があったが、洋紗、洋布、洋鉄など外国からの輸入品もあった。麦粉、棉糸と棉布は、黄河沿岸地域から原料として移出された小麦、棉花が、済南や青島などで加工され、さらに生産地に戻った加工品であった。陶器、煙葉、錫箔は他地域から黄河沿岸地域に移入されたものであった。このように、黄河沿岸地域は外国貿易の影響を受けると同時に、華北内部の地域経済からの影響も受けて商品経済が進んでいたといえる。

注

- 1) 四関とは県城に入る東西南北の四つの門外のところを指す。例えば、  
県城の南門外を南関と言い、東門外を東関と言う。近代まで、定期  
市はこのような場所で行われていた場合が多かった。四街とは四つ  
の門を結ぶ県城内の四つの主な街のことである。
- 2) 県城の東西南北及び東北の五つの門外にある定期市のことを指す。
- 3) 『支那省別全誌（山東省）』（第4冊）によると、1里は576m。
- 4) 訳文は天野（1940）を引用。
- 5) 原史料には東王荘と書かれているが、地図上では位置不明。
- 6) 壩子、大辛荘、沙河の市日は『続修歴城県志』巻3に基づく。
- 7) 第6図では皮家営がないが裴家営が記されている。裴の発音は皮に  
似ており、外邦図を調査した際に、間違って名称が記されたと考え  
られる。従って、裴家営業は皮家営のことと考えられる。
- 8) ここでいう野菜は栽培されたものではなく、自然にできたものを指  
している。

参考文献

- [1] 天野元之助「現代支那の市集と廟会—支那農業経済論の一齣」『東  
亜学』2, 日光書院, 1940。
- [2] 石原潤「河北省における明・清・民国時代の定期市—分布・階層  
および中心集落との関係について」『地理学評論』46-4, 1973。
- [3] 石原潤『定期市の研究—機能と構造—』名古屋大学出版会, 1987。
- [4] 加藤繁「清代における村鎮の定期市」『東洋学報』23-2, 1936。
- [5] 中国農村慣行調査刊行会編『中国農村慣行調査』（第4冊）, 岩波  
書店, 1955。

- [6] 中国農村經濟研究会編，堀江邑一訳『現代支那の土地問題』生活社，1938。
- [7] 中村哲夫「第7章 清末華北の農村市場」『近代中国社会史研究序説』，法律文化社，1984。
- [8] 田中忠夫『支那農業經濟の諸問題』学芸社，1935。
- [9] 森勝彦「清代・民国期の山東省における中心地の展開（1）」『鹿見島経大論集』33-1，1992。
- [10] 山根幸夫「明清時代華北における定期市」『史論』8，1960。
- [11] 水利部黄河水利委員会『黄河水利史述要』水利出版社，1982。
- [12] 実業部国際貿易局『中国実業誌第11冊』（山東省第1冊），宗青図書出版公司，1980，51（甲）-58（甲）。
- [13] 楊慶堃「二個農村市集調査の嘗試」『天津大公報』第11版，1933年7月8日。
- [14] 楊慶堃「市集現象所表現的農村自給自足問題」『天津大公報』，1934年7月19日第11版と1934年8月30日第11版（続第14期）。
- [15] G.W.スキナー著，今井清一・中村哲夫・原田良雄訳『中国農村の市場・社会構造』法律文化社，1979。
- [16] John Lossing Buck, *Land Utilization in China*, University of Chicago Press, 1937.

[付記]

本稿は2020年度に筑波大学へ提出した博士学位論文『近代黄河下流域における内陸水運と商品流通』の第4章の一部を改稿したものであり、河南省哲学社会科学規划年度項目（2021BLS007）の研究成果の一部でもある。また、鄭州大学2021年度校級教育改革研究与実践項目（2021ZZUJGLX021）の助成も受けた。